

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

近世江戸遺跡出土の漆製品の考古学的研究
An Archaeological Study of Lacquerware Excavated
from Early Modern Period Edo Sites

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科
都築 由理子
TSUZUKI, Yuriko

研究指導担当教員： 谷川 章雄 教授

本論文は、近世江戸遺跡から出土した漆製品に関する考古学的研究である。ここでは、江戸遺跡の武家屋敷、町屋、墓地遺跡から出土した漆製品を研究対象にし、文化財科学の手法による分析をおこなった。出土漆製品について、考古学では発掘調査によってどのような遺跡から、どのような個々の漆製品が出土したかを追究してきたのに対し、文化財科学ではどのような質の漆製品であるかについて、多くの漆製品の全体的な傾向を明らかにしてきた。さらに、美術史学は高度な漆工技術で製作された美術工芸品を扱い、民俗学が対象とする民具資料は主に村落に伝世されたものであり、各分野によって形成される漆製品の世界は大きく異なっている。

こうした漆製品の研究状況を踏まえて、本論文では、考古学に立脚しつつ文化財科学の手法による分析をおこない、美術史学、民俗学の成果を援用しながら総合的な視点によって、近世江戸遺跡から出土した漆製品の利用の実態を明らかにすることを目的とする。

発掘調査報告書の集成からみた近世江戸遺跡出土の漆製品の全体像は、出土点数の変遷においては、総出土点数 9,469 点のうち約 8 割が武家地からの出土であること、17、18 世紀代の出土点数は 3,000 点を越えるが、19 世紀代に入ると約 900 点まで減少することが明らかとなった。

このような傾向を踏まえ、従来の近世墓制・葬制の考古学的研究の成果から寺社地の墓地遺跡の墓に副葬された漆製品の考察をおこなった。副葬品には武家、町人など被葬者の身分・階層性が反映されるため、埋葬施設ごとに異なる副葬品の様相が認められた。

江戸における大名屋敷遺跡出土の漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析と、考古学的な器種分類、器種組成の変遷を重ね合わせた考察をおこなった。17 世紀前半にいわゆる近世的な椀揃形式を構成する飯・汁・平・壺椀、椀蓋が確認でき、各器種では鈎物系下地、鈎物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品と炭粉渋下地の量産品に大別できる。鈎物系下地、鈎物系+炭粉渋下地の堅牢なつくりの優品は、特に器面の塗り色が赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀に優先的に使用される傾向にある。一方で、赤一色、黒一色の飯・汁・平・壺椀には、炭粉渋下地の量産品の質のものも一定量存在し、中間的な漆器が存在する可能性が考えられる。

18 世紀以降に椀揃形式が成立し、漆製品が普及していくことから、次に 18～19 世紀代の町屋遺跡出土の漆製品を取りあげ、材質・製作技法の文化財科学的な分析から遺跡ごとの特徴を捉えた。

本論文では地理的に近接する 2 遺跡の比較をおこなったが、このような環境の遺跡間でも

櫛や笄などが多く加飾率が高いなど様相の相違がみとめられた。その要因の一つとして、木工技術別分類の差、つまり器種のバリエーションによるものがあつたと考えられる。漆製品は、樹種によって木工技術や材質・製作技法の適性が異なる。どのような器種があるか、木工技術や器種分類に材質・製作技法を検討することで、詳細な差異の要因が明らかになり、個々の遺跡出土の漆製品の特徴を捉えることができるのではないかと考えられる。そうした漆製品の特徴は、各遺跡の歴史的背景や居住者の生活につながるものと考えられる。

近世江戸遺跡の出土漆製品のなかには、武家屋敷を中心に出土する南部箔椀、吉野椀、朽木盆がある。これらの一部を文化財科学的な分析をおこない、美術史学による『漆椀百選』に挙げられている材質、装飾技法や文化財科学の先行研究結果と概ね一致した。南部箔椀、吉野椀、朽木盆は大名屋敷を中心に出土しており、低禄の旗本および藩士の墓である甕棺墓に副葬されている様相から贈答、宴席、茶の湯など特別な目的・用途の漆器であつたと考えられる。

さらに、近世江戸遺跡からは漆工用具が出土する。遺跡出土の漆工用具を現在の漆工用具と比較すると、貝製のパレットなど現在ではみられない用具がある。このような出土漆工用具の用途を明らかにするために、文化財科学的な分析をおこなった。

その結果、分析資料は貝に漆液を溜める溜容器であることがわかった。近世の絵画資料、民具資料によると漆を容れる器は主に陶磁器製の碗類であることから、貝は陶磁器の代用と考えられる。ここから、器物の補修や塗り直しを中心とした行商で漆を扱う手工業、職人の存在が考えられ、このような零細な手工業が大名屋敷内でおこなわれ、商人・職人を含めた周辺社会と接点をもっていたことを考察した。

以上のように、近世江戸遺跡出土の漆製品の全体的な様相を捉えた上で、墓の副葬品である漆製品には階層性があることが明らかになった。17世紀代を中心にした大名屋敷遺跡出土の漆製品から近世的な椀揃形式の成立過程、18～19世紀代の町屋遺跡出土の漆製品からは江戸の漆製品の遺跡ごとに異なる普及の様相がみられた。武家屋敷を中心に出土する南部箔椀、吉野椀、朽木盆は、贈答、宴席、茶の湯など特別な目的・用途の漆器であつた。また、江戸遺跡出土の漆工用具の一つである漆溜容器の分析により、大名屋敷における漆工の一端がうかがわれた。このように、本論文では、美術史学、民俗学、文献史料の成果を援用しながら、主に器種の分類などの考古学的な遺物の観察と、漆製品の材質・製作技法の文化財科学的な分析を総合的に捉えることにより、近世江戸遺跡の漆製品をめぐる多様な世界を明らかにすることができた。